

## ■ 編集だより

## 編集後記

社会学者のデュルケムが友人の自殺を機に理不尽に人生を奪う自殺についての疑問を抱き、友人に起こった悲劇をなぜ食い止められなかったかという問いを自らに発して、社会学の素養を生かしつつ多くの労力を割いてその研究に取り組んだという話を読んだことがある。その代表的な著作である「自殺論」の中でデュルケムは、人間社会のシステムに組み込まれている度合いが少ない場合に自殺が促進されるという現象を見出したことを記述している。その中で述べられている内容として、出生率の低下と自殺率の増加について家族関係という繋がりのもろ性の喪失によって説明できるとする考察があるが、この指摘などは1世紀以上を過ぎた今日でも決して古いものではない。

精神科診療の現場では日頃によくある悩み事から深刻なレベルにいたるまで様々な相談事があるが、その中には生死に関する言葉のやり取りが含まれている場合がある。希死念慮を伴う訴えがあるときの診察場面においては多大な労力を要するが、少なからず認められる「見捨てられ体験」において社会や周囲の人間関係の希薄さが自殺を促進してしまうという側面に目を向けたとき、医師患者“関係”をいかに豊かにできるかが大切である。自らの生を否定しようとするまさにその場において何らかの「命を救うための」介入ができる機会を我々は与えられているとも言える。そのような場面で目の前で述べられている様々な苦痛に対して、発せられている言葉や表情にこめられた苦しみや心の痛みへの共感に基づく理解がその関係を保つ力を与えともいえる。昨今、提唱されている自殺対策の大きな柱として、うつ病対策を中心とした精神科医療や心理的ケアへのアクセスの充実という指摘があるが、失業対策や教育問題といった社会的な問題へのアプローチのための各機関の連携やシステム作りとともに個々の現場での地道な対応や努力の積み上げが何よりも重要であると考えられる。

このような治療の現場を持つ精神科医療を支える役割を担う精神医学の研究においては単なる真理の探究に留まらないある種の「社会的な」動機付けのある研究（ないし論文）が時に時代を超える意味を持つと思われる。「社会が何を必要とし、何を求めているか」を把握し、それに答えていく「意味」を見出すような方向性を持つ論文との出会いを期待したいと思うとともに、編集委員の一人としての立場の中で何らかの社会的な役割を果たすことも自らに念じて努力していきたいと思う。

谷井久志